

保育指導案作成の理解を深める取り組みについて

本 村 弥 寿 子

Regarding efforts to deepen understanding of creating childcare guidance plans.

Yasuko MOTOMURA

長崎女子短期大学紀要 第49号 令和5年度 別刷

Reprinted form

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 49 : 69 – 78

2024

研究報告

保育指導案作成の理解を深める取り組みについて

本 村 弥 寿 子

Regarding efforts to deepen understanding of creating childcare guidance plans.

Yasuko MOTOMURA

キーワード：保育指導案 指導案作成 学外実習

1 はじめに

保育者を目指す学生にとって、学外実習は、子どもと関わることのできる機会であるため期待感が膨らむものである。しかし、同時に、子どもを受け止められるのだろうか、保育ができるのだろうかなど、不安も大きいものである。特に、本学幼児教育学科の学生が学外実習前に吐露することは、保育指導案が書けるかということである。先輩たちから学外実習での保育指導案作成の苦労話を聞き、さらに、保育指導案の作成方法を学ぶ科目「カリキュラム論」で3度も課題に取り組み大変な思いをしているため、不安感が大きくなると思われる。

筆者は、学生が学外実習時に保育指導案作成に対して不安感や抵抗感を強く感じないようにすべく、科目「カリキュラム論」において、保育指導案作成の理解を深める授業内容及び展開を工夫してきた。その内容に関しては、長崎女子短期大学平成27年度紀要第40号に、「保育指導案作成の理解を深めるための一考察」として掲載している。そこで述べた内容を基に、改善を加えながら8年間授業を展開してきた。しかし、その内容が学生にとって役立つものになっているのか、学外実習で活かすことができているのかということについては、把握ができていない状態である。そこで本稿では、平成28年度から令和4年度までの7年間に取り組んだ、「カリキュラム論」の授業改善の

内容を述べると共に、本学幼児教育学科2年生の、「カリキュラム論」に対する満足度をアンケートから読み解き、「カリキュラム論」における保育指導案作成の内容と方法について検証する。

2 カリキュラム論について

2.1 授業方法及び内容

受講対象：幼児教育学科1年生

開講時期：1年時後期

本科目は、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得するための必修科目である。受講対象者と開講時期は8年前と変わりはない。現2年生は、令和4年度1年次に、87名が受講している。授業は87名を2クラスに分け、週に1回、90分ずつの授業を15回行っている。

内容は表1のとおりである。平成29年に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（3法令）が改訂されたため、それに伴い軽微な内容変更を行った。しかし、8年前から大きな変更は無い。授業前半は、保育の計画の種類や作成上の留意点等についての理論を学び、後半、保育指導案の意義や記載内容について理解したところで作成に入る。

2.2 授業の実際

保育は、養護と教育が一体となった教育活動である。学生は、「教育」と聞くと、小学校以降の

表1 カリキュラム論 内容

1	カリキュラムの基礎理論
2	子ども理解に基づく保育の循環
3	教育課程編成の基本原則と方法
4	全体的な計画作成の基本原則と方法
5	幼稚園の指導計画の作成
6	保育所・認定こども園の指導計画の作成
7	保育指導案について
8	保育指導案作成の手順・書き方
9	指導案の作成（課題1）①…降園時
10	指導案の作成（課題1）②…降園時
11	指導案の作成（課題2）①…活動時
12	指導案の作成（課題2）②…活動時
13	指導案の作成（課題3）①…日案
14	指導案の作成（課題3）③…日案
15	指導案作成時の留意点確認

教科教育を連想し、子どもの成長にとって有益であると思われる内容を教えることを考えがちである。この考えでは、保育の基本がないがしろにされた保育となり、保育指導案にも反映されてしまう。そこで授業では、保育は環境を通して行うものであることや、子どもの主体的な活動を促すように行うものであることを繰り返し言い聞かせている。

このように、保育の基本や、小学校以降の教科教育とは異なる保育の独自性を伝えることが、この授業で重要視している部分の一つである。この理解が十分でないまま指導案を書いて保育を行っても、子どもの思いを大切にしたい子ども主体の保育は展開できないと考える。

保育指導案作成の内容や流れ等に関しては、長崎女子短期大学紀要第40号で述べており、現在も同様に行っている。よって、ここでは工夫・改善した点を述べる。

2.3 保育指導案作成の理解を深める工夫

本科目では、課題1から3までそれぞれを“指導原案”作りから“指導細案”“保育指導案”と、3段階を踏んで取り組んでいる。“指導原案”は、保育対象児の年齢や人数、保育の大まかな流れ等を授業者側が学生に提示し、それらを踏まえて保育を考えるよう指導している、いわば、保育を考える際の基本情報を整理するものである。よって、

学生が、自分の保育に対する考えや思いを文章化する作業はないため、作成に問題はない。学生にとって大変な作業は、保育の流れや保育者の言動をシミュレーションして細やかに文章で表す“指導細案”と、指導細案から特にその日の保育で大切にしたい援助を、理由を付けて文章化していく“保育指導案”の作成である。保育を観察したことがない学生が、保育をシミュレーションして段取りを順に書き出していくことは困難である。ましてや、自分の保育観を文章化することを求められる指導案は、保育未経験者である学生にとって細案作成以上に難しい。そこで、これを乗り越え、3つの課題で指導案作成の力を身に付けるための工夫・改善を行った。

2.3.1 工夫・改善①：保育指導案例の提示

学生は、「保育指導案」の意義や作成方法の説明を受けても、見たことも書いたこともないものを速やかには書けない。そのため、「カリキュラム論」の中で課題として3回作成する練習を行うのであるが、これまで経験した作文や日記、小論文などとは異なるうえ、保育を経験したことがない学生にとっては大変困難を感じるものである。このようなことから、平成28年度以降、各課題を済ませる度に、授業者が作成した保育指導案を「例」として配布した（資料1）。取り組み後に配布したのには理由がある。取り組み前に提示すると、学生によっては丸写しする者が出ると懸念されたためである。まず学生自身で保育をイメージし、それを自分なりに文章化することが指導案作成の訓練になる。そして、悩みながら取り組み、自分がつまずいたところや悩んだところが印象に残り、あとから「例」を示された時に、“先生はどの様に書いているのか”と、関心を持って読むのではないかと考えたのである。

2.3.2 工夫・改善②：指導細案例の提示

科目「カリキュラム論」で保育指導案を作成するにあたっては、“指導原案”から“指導細案”を作成して保育の流れを把握し、最後に“保育指導案”で当日の保育に対する思いをつづるよう

指導している。このように3つの段階を踏んで作成することは手間がかかり、時間を要してしまう。保育経験を積めば、いきなり“保育指導案”を作成できるが、保育経験のない学生にとっては困難である。また、実際の学外実習では、“指導細案”と“保育指導案”を合わせたものを“保育指導案”として作成している実習施設がほとんどである。そのため「カリキュラム論」では、評価の対象にはしないが“指導細案”を書いて保育をシミュレーションしたうえで“保育指導案”作成に取り組む流れを取っている。

“指導細案”作成も、学生にとっては難しいものである。保育者の行動や言葉などを順に書くのだが、保育の経験がないためイメージできないのである。イメージできたとしても、それを文章に表すことが難しいらしい。

そこで、令和元年度より、授業者が作成した“指導細案”の例を、課題1の分だけ配布するようにした（資料2）。配布のタイミングは、学生が課題1の“指導細案”を書いた直後である。「子どもたちに、いつどのような指示をするのか」「どのような子どもの姿が見られそうか」「子どもにどんな言葉をかけるのか」「教材をいつどのようにして子どもに配るのか」など、授業者が時系列に沿って具体的に書き示した。これを見れば、学生が、自身で作成した細案と比較し、足りない部分が把握できると考える。そして、授業者、つまり、保育経験者の考える保育の流れを把握することもできると考える。さらに、具体的な言葉かけのセリフなどから、その場の雰囲気も感じられるのではないと思われる。

2.3.3 工夫・改善③：学生が取り組む作業の 絞り込み

保育指導案の「例」を示す方法は、課題2、課題3に取り組む際、前の課題の例を参考にしながら取り組むことができる。しかし、初めて取り組む課題1の際、参考にするものが全くない状態のままである。そこで、令和2年度より、課題1の“子どもの姿”“ねらい”“予想される子どもの活動”“環境”の欄に書きこむ内容を授業者から提

示し、指導案作成で最も重視する“援助・指導の留意点”について、書き始めの部分だけ例を示すようにした。その際、授業者の保育観・子ども観を学生に伝えたいという具体的な文章を示し、その続きを同じように自分で考えて仕上げる形にした。

このように、学生が初めて取り組む課題1において、すべてを自分で考えるのではなく、実際の保育実践につながる“援助・指導の留意点”のみを集中して考えるようにしたこと、つまり、学生が取り組む作業を絞り込んだことで、学生の負担感や抵抗感が軽減されることにつながった。また、初めて作成する指導案にもかかわらず、書き上げた時にそれなりに形が整うため、学生にとって達成感が感じられるものとなった。さらに、授業者にとっても、添削をする部分が絞られ、丁寧に効率よく評価できるようになった。

2.4 工夫・改善を施した後の、学生が作成した 保育指導案の内容

平成28年度から令和4年度までの「カリキュラム論」における保育指導案作成の取り組みで、前述のような工夫・改善を試みてきた。この工夫・改善を行うようになって、最初に作成する課題1の時から書き込み量が多くなっていると感じている。そのため、一目見た時に、「よく書いている」と感じられる指導案となっている。また、文章に関しても、授業者の作成した「例」を参考にしながら、学生なりに自分の保育に対する思いを文章に表わそうとしているものが増えている。このことから、学生が保育指導案作成に対して抱く抵抗感や困難感が軽減したのではないかと感じている。実際、令和4年度入学生の「カリキュラム論」受講直後に取った“令和4年度後期授業評価アンケート”では、授業の内容やレベルが「十分適当」「ほぼ適当」と回答した学生の割合が90.3%であった（図1）。

3 学外実習における「カリキュラム論」での 学びについての検証

「カリキュラム論」の15回の授業のうち9回は“保育指導案”作成に係るものである。現場の保

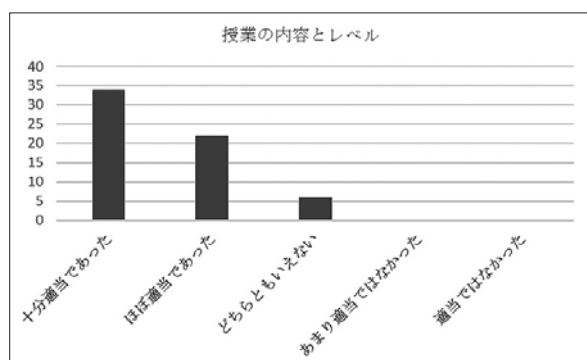


図1 R4年度後期「カリキュラム論」授業評価アンケート
「授業の内容とレベル」

育者が“保育指導案”を作成する機会は、研修会等で自園の保育を公開する時くらいである。つまり、現場に出ればほとんど書くことはないと言える。よって、授業で練習するのは学外実習のためと言ってよい。では、実際、「カリキュラム論」で学んだことは学生にとって学外実習で役立っているのだろうか。図2のとおり、「カリキュラム論」に対する「令和4年度後期授業評価アンケート」の結果、88.7%が「十分満足」「ある程度満足」と回答している。これが学外実習を経験した後、「カリキュラム論」での学びについてどう考えているのかを明らかにすることが、「カリキュラム論」での学びの内容・方法を検証するために必要であると考え。

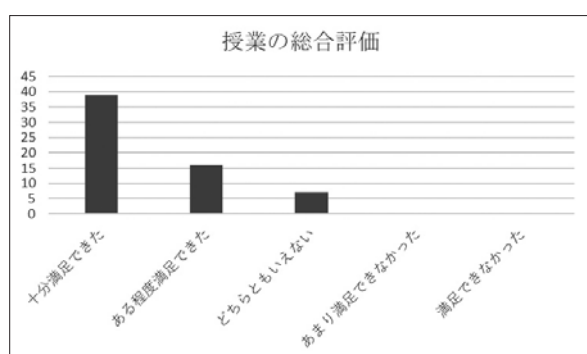


図2 R4年度後期「カリキュラム論」授業評価アンケート
「授業の総合評価」

3.1 検証の方法及び結果

令和4年度入学生で学外実習を受講した幼児教育学科2年生85名に対し、「カリキュラム論」に関するアンケート調査用紙を配布した（資料3）。調査時期は、令和4年度入学生の学外実習がすべて終了した令和5年10月17日の「保育・教職実践

演習」の授業内である。実習延期等で授業欠席者がおり、最終的に76名より回答を得た。結果は、表2のとおりである。

表2 「カリキュラム論」に関するアンケートの結果

Q1 カリキュラム論で学んだことは学外実習で役立ったか	
	人数 (人)
①役立った	64
②まあまあ役立った	12
③あまり役立たなかった	0
④役立たなかった	0
Q2 課題の数（3つ）は適切だったか	
	人数 (人)
①適切だった	44
②まあまあ適切だった	31
③あまり適切ではなかった	1
④適切ではなかった	0

3.1.1 Q1の結果について

Q1のアンケートの結果より、回答したすべての学生が、「カリキュラム論」で学んだことが学外実習で役立ったと感じていることが分かる。

“役立ったと考える理由”の記述欄には、「実習に必要なことが学べた」「実習で困らなかった」という記述が多くみられた。中には「実習で褒められるものを書けた」と、自信につながった学生もいた。

さらに、「書き方や子どもへの接し方について参考になった」「子どもの年齢に合った接し方が分かった」という記述も多くみられた。これは、“指導細案”“保育指導案”の「例」を基に、保育経験者である授業者が自身の保育観・子ども観を語り、それを踏まえた保育について伝えてきたことが影響していると考え。

3.1.2 Q2の結果について

Q2では、「カリキュラム論」で指導案作成を3回行ったことが適切であったかを問うた。「カリキュラム論」の授業回数15回のうち、指導案作成に関する知識・技能を身に付ける内容を組んでいる授業が9回あるものの、作成に取り組む時数は一つの課題につき2コマである。授業内だけで

仕上げることはできないため、授業時間外にかなりの時間を割いて作成に取り組むこととなる。他の授業の課題も多いため、学生の負担軽減に向けて課題数を減らすことも考えた。しかし、学外実習で学生が任される保育場면을踏まえると、最低3場面の保育指導案作成の経験が必要であると考えている。よって、筆者が「カリキュラム論」を担当するようになってから、一貫して課題は3つで進めている。

アンケート結果を見ると、76名中75名が“適切だった”“まあまあ適切だった”の回答であった。

“まあまあ適切だった”と回答した理由は、「もう少し多くてもよかった」「もっと書いて慣れる必要がある」と、課題を増やして構わないと考えている意欲的な記述がほとんどであった。しかし、“まあまあ適切だった”の解答者中一人が「書く期間が短く、睡眠がとれない」と記述していた。加えて、“あまり適切ではなかった”と回答をした一人の記述欄には、「他の課題もあり、しっかり書く時間が足りなかった」との記述がなされていた。

3.1.3 Q3・Q4の結果について

Q3、Q4では、「カリキュラム論」でさらに学びたいことや意見・要望を自由記述式で記入させた。記入されたものから授業の工夫・改善につながると思われるものを取り上げ、も筆者によって分類したものを以下に示す。

〈授業の内容・方法について〉

- ・具体的に教員と一緒に作成を進めてほしかった
- ・いろいろな保育の書き方を教えてほしかった
(練習したかった)
- ・0歳児の指導案を教えてほしかった
- ・子どもの姿を予想することが難しい
- ・シミュレーションを多くすること
- ・多くのパターン(保育?子どもの姿?)の具体例がほしい
- ・模擬保育をすると作成のイメージがつかみやすいのかも
- ・子どもの気持ちの聞き方を教えてほしい

- ・部分実習を考える練習をもっと取り入れてほしい

〈保育指導案の記述方法について〉

- ・指導案に書くべき援助と書かなくていい援助について知りたい
- ・指導案ならではの文末の書き方を学んでおけばよかった
- ・援助の考え方、言葉の選び方をもっと教えてほしかった
- ・訂正、アドバイスがほしかった

上記の意見・要望から、学生は指導案を作成する際、保育のイメージが乏しいことを問題視していることが分かる。そのため、授業者には保育の具体例を求めたり、共にシミュレーションしたりを望んでいると思われる。模擬保育に関しては、「カリキュラム論」の開講と同時期に、他の複数の科目で行っている。それらの科目と連携した保育指導案作成も考えたい。

また、保育指導案の文章作りにも困難を感じていることが分かる。授業者が、文章構成の基本パターンを教え、学生が自分の考えをパターンに当てはめながら表現するよう指導しているが、それでも学生にとって文章作りは難しいようだ。授業者は、文章表現についてできるだけ丁寧に指導したいと考えてはいるため、添削を丁寧に行いたいと考えている。しかし、文章から学生の思いや考えを察しながらであるため、全学生分を丁寧に添削することは時間的に無理がある。そのため、学生一人一人の指導案に、特に気になった部分の添削をし、全体的に言える改善点は授業で伝えているが、学生の学びを深めるためには、一層の工夫・改善が求められているようだ。

3.2 アンケート結果を受けての授業の工夫・改善

「カリキュラム論」での保育指導案作成に関する学びは、学外実習を終えた時点でのアンケートの検証から、学生にとって満足できるものであることが分かった。しかし、指導案を作成するため

に保育をイメージすることや指導案としての文章表現については、さらに工夫・改善を行うことが、学生の授業に対する満足感や学外実習に向けての意欲・自信につながるようである。

工夫・改善の内容として、まずは学生が保育をイメージしながら指導案作成に取り組める方法を考えたい。そのために、具体的な子どもの様子を伝えたり保育場面の動画視聴を取り入れたりを試みたいと考える。また、模擬保育を実践する授業の内容を精査し、「カリキュラム論」で活用できる内容を把握し、他科目と連携を取りながら進められるよう考えたい。

指導案の文章表現に関しては、授業者が作成した「例」を丁寧に解説したり、保育指導案作成に関する参考書や資料を紹介したりし、多くの、そして様々な保育場面の文章表現に学生が触れられるようにしたいと考える。

Q1において、“役立った”と回答しながらも、「何度書いてもわからない」と記述している学生が一人いた。学外実習では実習園の保育者から指導を受けながら、何とか指導案を作成して保育を行えたが、自身としては明確に理解できず、悩み続けながら書き上げたと思われる。その時の正直な気持ちをアンケート回答に表したものであろう。

このように、保育指導案作成は、学生の能力差が大きく影響する活動である。そのため、すべての学生に同じような指導を行うのではなく、基本事項は全体に繰り返し教授しながら、学生の力量や要望に応じて個別に対応していくことも考えていきたい。

5 おわりに

平成28年度から令和4年度の7年間に、授業者が“保育指導案”や“指導細案”の「例」を作成し配布するなどの工夫・改善を行い、学生の保育指導案作成の理解を深める取り組みを行ってきた。令和4年度入学生の、「カリキュラム論」の授業評価アンケート及び学外実習直後の「カリキュラム論」に関するアンケートから、これまでの工夫・改善は、学生の学びを深めるために、そして学外実習に活かすために大いに効果を奏したと捉える

ことができる。一方、一層の工夫・改善が必要である部分も見えてきた。今後も、学生の学びを深めるため、授業の工夫や改善を試み、そして、学生一人一人の力量や要望を捉えながら、個別最適な学びを提供すべく取り組みたいと考える。

参考文献

- ・本村弥寿子「保育指導案作成の理解を深めるための一考察」『長秋女子短期大学紀要第40号』2016 p31-37
- ・開 仁志「これで安心！保育指導案の書き方」 北大路書房 2008
- ・開 仁志「保育指導案大百科事典」一芸社 2012
- ・文部科学省 幼稚園教育要領 2017年度改訂版

〈資料1〉保育指導事例

課題1 指導事例

保育指導案 No. 1

学生番号 23YC55 氏名 ○○ ×子

6月 10日 (水)

ほし組 (3 歳児) 男児 14名・女児 16名 計 30名

時間	予想される子どもの活動	援助・指導の留意点	環 境
13:30	○排泄をする。 ・排泄をする。 ・手洗い・うがいをする。	・排泄の様子を見守り、パンツの上げ下ろしに手を取っているなど援助が必要と思われる場合は、助言したり手伝ったりして速やかに排泄ができるようにする。 ・手洗い・うがい・うがいが十分でない子どもには、その重要性を伝えながら励ましたり手を添えたりして、子どもが意欲的に取り組めるような援助を行う。 ・並んで順番を待っている子どもを大いに認めることで意欲を高めるとともに、周囲の子どもにも順番を守る大切さを知らせるようにする。	＜保育室＞（降園準備の時）
13:40	○降園準備をする。 ・タオル・コップをカバンに入れる。 ・カバンを着ける。 ・帽子を被る。 ・席に座る。	・所持品の始末の順番を示した絵カードを黒板に貼り、それを見ることで子どもが自分で降園準備を進められるようにする。 ・タオル掛けとコップ入れのかごをロッカーの近くに移動し、所持品の始末がスムーズに行えるよう配置する。 ・自分で準備を進めている子どもには、頑張っていることを認める言葉をかけ、一層意欲的に取り組めるようにする。 ・所持品の始末の仕方が分からず困っていると思受けられる子どもには、絵カードを一緒に見て考えたり助言したりして、次の行動に子どもが気付くよう援助する。 ・保育室を歩き回るなど降園準備に取り組まない子どもには、帰る時間が遅くなるなど後で困ることを伝え、準備に取り組もうという気持ちを持てるようにする。 ・保育者は、降園準備の様子を見守りながら幼児用椅子を所定の場所へ並び、準備ができた子どもが落ち着いて次の活動のを待つことができるようにする。	・絵カード
13:50	○降園前のひとときを過ごす。 ・歌を歌う。 「かたつむり」「せつけんさん」など ・手遊びをする。 「うげいさん」など ・絵本を見る。 『おまがきれっしや しゅっぱつしんこう』 ・楽しかったことを聞いたり話したりする。 ・明日の予定を聞く。	・みんなが歌を歌ったり手遊びをしたりして楽しい雰囲気を作り、子どもが保育者の話を楽しみに思えるようにする。 ・保育者が率先して明るく元気に歌うことで、子どもが抵抗なく活動に取り組めるようにする。 ・子どものテンポに合わせて歌ったり手遊びを行ったりし、みんなが楽しめるようにする。また、活動に抵抗を示す子どもがいる場合は、何度か繰り返して行うことで抵抗感を減らすようにする。 ・子どもが興味を持って一日を振り返り替えられるように、クラスの子どもの姿をわかりやすく紹介する。 ・子どもから話し始めた場合は、保育者がしっかりと聞いている態度を示して安心感を与えるとともに、他の子どもに対しても人の話を聞く態度の手本になるようにする。 ・明日の予定や遊びに関する話を伝え、子どもが明日の登園に期待を持てるようにする。	＜保育室＞（話、絵本の時）
14:00	○降園する。 ・先生や友達と挨拶を交わす。	・保育室のテラス側に子どもたちが並びよう促し、すぐに親もとへ行けるようにする。その際、座っていた椅子周辺に忘れ物をしていないか呼びかけ、子どもと共に確認をする。 ・保護者を確認し、子どもの名前を呼んで確実に保護者の元に子どもを渡すようにする。 ・保育者が、子ども一人一人の目を見て笑顔で挨拶をすることで、挨拶を交わす楽しさを感じられるようにする。	・絵本 『おまがきれっしや しゅっぱつしんこう』

〈資料2〉指導細案例

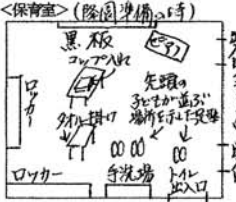
課題 | 指導細案例

保育指導案 No. 1

学生番号 23YC55 氏名 ○○ ×子

6月 10日 (水)

ほし組 (3 歳児) 男児 14名・女児 16名 計 30名

子どもの姿	- 園生活に慣れ、ままごとやブロック、砂遊びなど好きな遊びを見つけて楽しむようになった。隣にいる他の友達の様子を見て真似をするなど、徐々に友達に興味を示し始めている。 - 友達に興味を持つにつれ、相手の使用している遊具を勝手に取るなど、トラブルも起き始めた。 - 園生活の流れを把握し、所持品の始末などを自分でしようとする子どもが増えてきている。しかし、周囲に気を取られたり把握が十分でなかったりして、保育者の援助が必要な子どももまだ多い。 - 保育者に信頼感を持ち、気軽に話しかけたり話を聞いたりするようになった。	ねらい - 降園準備の仕方がわかり、自分で所持品の始末をしようとする。 - 歌を歌ったり絵本を見たりして、降園前のひとときを楽しむ。	
時間	予想される子どもの活動	援助・指導の留意点	環境
13:30	○排泄をする。 - 排泄をする。 - 手洗い・うがいをする。	- トイレに行くよう言葉を掛ける。「おしっこ行ってきましょう」 - 並んで待っているか、パンツの上ず下ろしがスムーズにできているか、スリッパは並べているか、手を石鹸で洗っているかなどを確認しながら見守る。 - 良い習慣が身に付いている子どもには、認めたり褒めたりする。「静かに待っているね、かつこいちゃん」「スリッパが揃っているよ。次のお友達も履きやすいね」「パンツ自分で上げたの？きれいにできたね」「シャツがズボンにきれいに入っているよ。かつこいちゃん」「ハイ菌が流れていったね。」「いっしょに洗っているね、お兄さんみたい」など。 - 習慣が身に付いていない子どもには援助したり指導したりする。「一番後ろに並ぼうね、順番守るお友達かつこいちゃん」「へくん、一緒に並べようよ」「出発のお船にしようね」 - パンツの上ず下ろしに時間がかかっている子どもには、「がんばれ」「あと少し」と励ましたり「後ろのパンツを持ってみよう」と助言したりする。助言だけではできない子どもには、手を貸す。 - 手洗いが丁寧にできない子どもには、手を添えていっしょに洗う。 - 石鹸が手に残っていないを確認する。残っている場合はすぐ洗い流すように促す。	<保育室> (降園準備の手) 
13:40	○降園準備をする。 - タオル・コップをカバンに入れる。 - カバンを着ける。 - 帽子を被る。 - 席に座る。	- 排泄が済んだ子どもにも帰りの支度をしよう声をかけて、所持品の始末の順番を示した絵カードを黒板に貼る。「おしっこが済んだ人は、お帰りの支度をしてください」「もう、順番覚えたかな？そうそう、タオルをかばんに入れるんだよね」「先生が“お帰りカード”を貼りますので、それを見て自分でやってみましょう」 - タオル掛けとコップ入れのかごをロッカーの近くに移動する。 - 自分で準備を進めている子どもには、頑張っていることを認める言葉をかける。「先生に教えてもらわなくても自分でできるんだね、すごいな！」「カード見て頑張ったんだね、偉いよ！」 - 所持品の始末の仕方が分からない子どもには、絵カードを一冊に見て考えたり助言したりする。「ここまでできたね、すごい！じゃあ、次は何かね、カード見てみよう。どこまでできているかな」「先生ちゃんと見ているよ。そうそう、ちゃんとやってみよう、頑張るよ」 - 保育室を歩き回ったり遊びの続きをしたりして降園準備に取り組まない子どもには、注意を促したり励ましたりする。「もうお帰りだよ。お母さんが待ってるよ」「一人だけ置いてきばりになっちゃうよ」 - タオルをたたんでいる子どもには認める言葉を掛ける。「きれいに畳んでいるね」「じょうずだね」「いつもやっているの？すごいね」 - たためていない子どもには、目の前でやって見せたり自分でたためるよう助言したり励ましたりする。「先生がしてみようね、見てね」「床において、半分こ。また半分こ。くるくるして、はいできあがり！」「きれいに畳んだね」「かばんに入れやすいね」 - 幼児用椅子を所定の場所に並べ、降園準備のできた子どもに座って待つよう促す。「お友達ができたお友達、お椅子に座ってお利口さんになってください」 4分の8くらいの子が座ったくらいでピアノで優しい曲調のBGMを弾き始める。 - ピアノを弾きながら全体の様子を見て助言等する。「へちゃん、あと少しだね、頑	・絵カード (お帰りカード) 

13:50	○降園前のひとときを過ごす。 ・歌を歌う。 「かたつむり」「せっけんさん」など ・手遊びをする。 「ひげじいさん」など ・絵本を見る。 『はみがきれっしや しゅっぱつしんこう』 ・楽しかったことを聞いたり話したりする。 ・明日の予定を聞く。	張って「みんなが静かに待っていてくれるよ。よかったね」「お支度がまだのお友達を静かに待ってあげられるなんて、偉いね。優しいね」 ・全員が着席したところで、「かたつむり」の曲を元氣よく歩くテンポで引き始める。そして、保育者が明るく元氣に歌う。 ・「元氣なかたつむりさんがいっぱい歩いてうれしいな」「今度は何のお歌かな」と次の歌につなげる。 ・歌い終わったら、「みんなのお歌ってきれいな声で先生大好きです」などと褒めながら子どもたちの前の椅子に移動して座り、「ひげじいさん」の手遊びを始める。 ・進んで活動に取り組まない子どもには、「～くん、一緒に歌おうよ」と優しく声をかけ、自分から活動に取り組むときを待つ。また、2～3度繰り返して行ってみる。 ・「では、皆の大好きな絵本を見ましょう。今日のおおきな絵本はなにかな?」と言いつつ絵本を出す。 ・子どもが絵本を見ているか全体を見て確認し、見離そうな子どもには、前へ来るよう促す。 ・「今日、先生、とっても楽しかったことがあったんだよ。今から教えてあげるね」と、クラスで楽しんでいた遊びや活動を紹介する。 「〇ちゃんと△ちゃんがおままごとしていたんです。それで、～だったんだよ。……明日もままごとするんですって。先生も仲間に入ろうかな? みんなもままごとしたいなって思ったら、『入れて』って言ってみようね」 「〇くん、砂場の小山が大きくなったね。先生びっくりしたよ。どうやって作ったの?」〇くんへ話を振ってみる。 ・子どもから話を始めた時は、目を見て笑顔でうなづきながら聞き、子どもが言葉に詰まった時は、分かる範囲で代弁する。子どもが話し終わったら、「お話を聞かせてくれてありがとう」とお礼を言う。 ・「今日も楽しかったね」と振り返りをまとめた後、明日の予定や遊びに関することを伝える。	<保育室> (話、絵本の時) ・絵本 『はみがきれっしや しゅっぱつしんこう』
14:00	○降園する。 ・先生や友達と挨拶を交わす。	・話が終わり終わったら、「星組さん、立ちましょう」と元氣に声をかけ、その場に立つよう促す。その後、さようならの挨拶をする。「帰りのご挨拶をしましょう。先生さようなら、みなさんさようなら。」 ・保育室のテラス側に子どもたちが並ぶよう声をかけ、保育者が先頭を誘導しながら並ばせる。「〇ちゃんから順番に、はいずり転ばつぽ」と列車をイメージさせながらゆつくりテラス側へ移動し、座らせる。 ・保護者に挨拶をし、全体に対しての連絡をする。その後手前にいる保護者から確認し、子どもの名前を呼ぶ。 ・保育者から子どもの目を見て笑顔で挨拶をし、子どもも目を見て挨拶ができたなら握手をしてから保護者に渡す。	

〈資料3〉

「カリキュラム論」に関するアンケート

「カリキュラム論」で学んだ保育指導案作成について、以下のアンケートに協力をお願いします。

1 「カリキュラム論」で学んだことは、学外実習で役立ちましたか。

- ① 役立った ② まあまあ役立った ③ あまり役立たなかった ④ 役立たなかった

1-2 1の理由を教えてください

--

2 課題の数（3つ）は適切でしたか。

- ① 適切だった ② まあまあ適切だった ③ あまり適切ではなかった ④ 適切ではなかった

2-2 2の理由を教えてください。

--

3 学外実習を経験したうえで、「カリキュラム論」でもっと学んでおいた方がよかった、また、もっと教えてほしかったと思う内容があれば教えてください。

--

4 その他のことで意見・要望等あれば記入してください。

--

ご協力ありがとうございました。